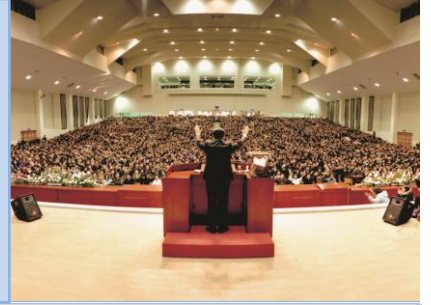


# 恵みと真理のニュース



2019 年 10 月の三次 恵みと真理教会

韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net



[証]

神様に祈って忍耐して御言葉に従順すると神様は 万事が益となるように共に働くことを、わたしたちは知っています。”

私は会社生活をする中で旦那に出会って結婚して一番目の息子を産んで3年経ってから急に下血をしました。病院では甲状腺機能低下症という診断されました。一生薬を飲まなければならないという医師の言葉に天が崩れるようでした。悪い夢もみました。隣の家に住んでいる人に導かれて恵みと真理ニュースを持って伝道する区域長に出会いました。区域長の助けで私が通っていた教会が異端に属していたことを知りました。聖書の通りに信じる正しい信仰を持って神様を礼拝し仕える信仰生活をするべきだと区域長が懇懇としてくれました。区域長の導きで恵みと真理教会のスワン聖殿の平日礼拝に参席しました。ハレルヤ！その日、教会長の牧師の説教を聞いて大きく恵みを受けました。礼拝に恵まれて以前に通っていた様々な問題があるよりましだと思った以後、恵と真理教会に登録しました。聖霊充滿の祈り会で御言葉に恵みを受けていげんの恵みを受けました。私の信仰が成長しながら牧師の説教を聞けば聞くほど神様の御言葉は生きて働いているのを実感しました。蜂蜜のように甘くて大好きでした。平信徒聖書勉強の過程に入学して体系的に聖書を習い児童区域長の職分と成人区域長の職分を受けて教会を仕え伝道に力を尽くしました。魂の救いを得て主のすることをするようになって世のすべてを得たように心が楽しくて幸せでした。奉仕しながら心細い性格も積極的な性格で変えて神様が共におられ助けてくださることによって不安もなくなり、心が明るくなりました。婚家が儒教の思想と伝統を徹底的に従う家庭でした。私が教会に通うのを旦那が口を極めて反対しました。私の信仰が成長すればするほど迫害も酷くなりました。旦那が夜勤をして安心して教会で礼拝を捧げているとき旦那が来て狼藉を働いて礼拝を妨害したことが何度もあります。また。会社で夜勤をしているはずだった旦那が私を探しに教会に来た事が数回もありました。私は旦那がいない時、ひそかに児童区域礼拝、成人区

域礼拝を捧げながら神様を委ねました。私が教会に献金することまで旦那が反対しながら酷い話をして大ゲンカをしたら泣いた娘と息子を宥めずかしながら私も一緒に泣きました。主を離れて生きることが出来なかったので息子を連れて遠く逃げたかったです。“義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。わたしのためにのしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。”(マタイの福音書5:10~12) 御言葉を黙想しながら慰められ夜中に出て遊び場でぶらんこに座って泣きながら“神様、迫害する旦那のため祈ります。旦那もイエスを信じて救われますようにしてください。” 祈る時旦那が私を連れてきました。

“私は本当に教会が嫌いだから行かないでね。”という旦那に“私に強く教会に行かないで礼拝しないでと言うのはもう死ぬ。と言うのと同じだ。一生薬を飲まなければならないが、神様を信じて礼拝して生きるのので平安で神様だけを考えると真に幸せだ。絶対やめられない。と強く言いました。すると旦那は長く悩んで“そうしたら、分かった私がいけない時だけ教会に行って来い。”としました。10年間続いた旦那の迫害がそのように終わりました。

その次の日が母がいつもお寺に行く仏生日でした。でもその日は一日家におられました。“今日はおかしくてお寺に行きたくな”と言いました。主日は旦那が私と子供達を教会に連れて行ってくださいました。その後、数年経ってクリスマスの朝でした。教会に行く準備をする私の隣で旦那が洋服を着ていました。“なぜ洋服を着ていますか？と聞く“私も教会に行かなきゃ。”としました。ハレルヤ！旦那の姿が変わったように見えました。本当にかっこよく見えて、私がまるで新しい新婦になったような気分でした。旦那と共に教会に行くその時間が世のすべてを得たように夢みたいでした。旦那が主を受け入れて教会を通い始めてから、姑も自ら教会に行き信仰生活を始めました。

息子3人を育てながら舅姑まで仕えて生きるため経済的に生活が大変でした。旦那が退職を準備して不動産の資格準備をして資格を習得してスワン事務室を開きました。職員で実長を雇って4年くらい熱心に事業しましたが、7人家族が生きていくためにはいつも足りなかったです。“わたしが、あなたの神、主。あなたをエジプトの地から導き上った神。口を広く開けよ、わたし

はそれを満たそう。”という御言葉に委ねて神様の助けを求めました。神様から導きられ知り合いの人が同じ事業をするプンダン新都市で事業場を移しました。高い賃料が負担でしたが、旦那と相談して勇気を出して依然しました。

すると周りの人々から否定的な話を聞きました。すると神様が共にしてくださるという信仰で不安を抑えて事業場で朝ごとに旦那と共に創世記の一章から読んだ後から仕事を始めました。そうしたら驚くほど神様が毎月、必要以上のお金を設けるように働いてくださいました。

状況が大変な時、旦那は私よりもっと信仰と希望の話をしました。そのような旦那がいて心が強くて力が出ました。大変な状況をよく克服して私の事業場が固く位置付けました。私はプンダン、新都市内のスネ同の駅の仲介業の団体の総務の仕事も任されてました。その間、長男も成長して神様の恵みで良い会社に就職して主のことをよく信じる家庭を作り幸せに住んでいます。

二番目の息子も就職が出来ない時期に神様が助けてくださり良い会社に就職しました。このように息子達の道を摂理して導いてくださった神様に感謝します。姑が天国に行かれた後も舅は教会に行かなかったです。孫の嫁が頼んでも頑なに断りました。そうする中で去年の秋に、長男が会社の健康診断で脳の中に瘤があるのが発見されました。このことで家族が心配しました。上の息子はむしろ、“神様が私を守ってください。”私たちを癒ぐされてくれました。舅にも“おじさん、心配ですね？そうしたら教会に行き私のため祈ってください。”と願いました。

帰って来た主日に舅が礼拝に参席してイエス様を受け入れました。舅はその後は礼拝に休まずに説教中に“アーメン”と答えて、聞きたいことがあると私に聞きます。“息子を通して頑な舅を救って下さり、家庭が福音化されるようにしてくださいました神様の恵みに感謝します。長男も神様の恵みの中で手術がよくできて回復も早かったです。

大変な事がある時、最後まで忍耐して御言葉に従順すると万事が益となるようにして下さる神様の恵みの中でいつも体験します。私を正しい信仰の道で導いてくださる神様、人の力では耐えられない苦難を受ける時、共におられ守ってくださった神様、主の恵みと愛が溢れる家庭になるようにしてくださった神様を賛美します。神様は私に知恵と能力を下さって職分をもっと担えるように祈ります。



[信仰コラム]

生涯を要約した文 (1)

“...彼が移される前に、神に喜ばれた者と、あかしされていたからである。信仰がなくては、神に喜ばれることはできない...” (ヘブライ書11:5、6)

聖書には私達の生涯を何だと要約できるかを知らせる人が多く登場します。彼らの生涯を調べてみると私の生涯の要約をこのように形容できたらより望むべきもないと言っても良い文を探すことができます。その中で一つである“彼は神様を喜ばしながら生きた。”と要約される生涯について調べてみます。エノクに対して“神様を喜ばせる者”だと聖書に明示されました。彼の生涯に対する記録を見ると神様を喜ばせる生活態度が何であるかを明らかに知ることができます。第一、エノクは神様が必ずおられることを信じます。神様がおられるの信じない者とは無神論者や不可知論者だけをおいて言うのではなく、有神論者達も含まれます。なぜなら誠な神様はひたすら一方でおられるからです。エノクは誠な神様がおられるを信じました。ひたすら一方でおられる神様、天地を創造なさった神様を信じました。アダムに救い主をお送りなさることを啓示なさった神様を信じました。アベルのように救贖者をお送りなさる神様を信じました。エノスが礼拝したエホバ神様を信じました。生活がしんどくつらい時でも必ず神様がおられるの信じました。

300年を子を出産したからエノクは大家族の族長になり彼らを養って教え、時には裁判官の役割をしながら忙しく生きました。しかし、必ず神様がおられるのを意識して神様と同行しながら生活するから楽しいでした。物事に神様の導きと助けを求めて神様に頼りました。神様がいつも共におられるということを経験ではなく実際に感じて楽しんで感謝しながら生きました。神様もこのようなエノクの手を握って導かれながら助けられるのが楽しかったでしょう。エノクを死を経験する暇もなく神様の御手に導かれて神様の国に入りました。皆さんもエノクのように必ず神様がおられるの信じて神様と共に同行することで神様を喜ばせる生涯になってください。

第二、エノクは神様が御自分を求める者に報いてくださる方であることを信じました。

神様が御自分を求める者に報うという御言葉には様々な意味が含まれています。一、神様が御自分を求める者に深い関心を持って保護して下さるという意味があります。神様に尋ねて求めるべきです。これは神様の愛と能力と善と真実に対する信頼から始まるので神様を喜ばせます。二、全てのことが善で有益になるようにして下さるという意味があります。いかなら地境でも報いてくださる神様を信じるべきです。皆さんは艱難を受けたら“私の一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれる”と話してください。悪を善に変えてくださり、万事を益となるようにして下さる神様を固く信じてく

ださい。そうして忍耐力を持って積極的に大胆な姿勢で問題に対処しながら進んでください。三、将来神様の国で報って下さるという意味があります。コリント人への第一の手紙3章13節から15節にはキリストの審判台で聖徒達が受ける賞に関する御言葉が記録されています。そして“見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう。”という主の御言葉が聖書の最後のページを飾っています。

エノクはイエス様の再臨と審判に関して予言しました。敬虔ではない人々に審判を警告して悔い改めを促すことに躊躇いませんでした。神様が喜ばれることが何であるかを知ったからです。神様が報いてくださることを信じて再臨と審判のメッセージを述べ伝えました。エノクが生きた時より主の再臨がより切迫した時代に生きる私達はより熱烈にキリストの再臨と審判に対するメッセージを述べ伝えなければなりません。エノクはこの世で天に移される前に“神に喜ばれた者と、あかしされていたからである”と聖書に記録されています。皆さんの生涯に対する要約もこのようになるよう祝福します。

「チヨヨンモク牧師先生の信仰コラム『緑の牧場、清い川』本の語り中」

## 落膽しない理由



恵みと真理教会 チョヨンモク 牧師

人々を落膽させるものの中で共通的なもの二つをさし出すと、肉身の衰退と苦難に該当するものです。老いと死は必然的なことです。老いと死についての抵抗すればするほど抵抗のサイズだけ落膽されます。また、人を落膽させることは、一生の間に経験されるいろいろの試練です。患難をあわずに住んでいた人は誰もいませんヨブが受けた苦難を見て、ヨブの友人エリパズは「人が生きて 悩みを受けの

は、火の子が上に飛ぶにひとしい」(ヨブ記 5:7) としました  
ところで、このようにすべての人を落膽させる肉身の衰退と苦難も聖徒たちを落膽させません。今日の本文は、その理由をこう述べています。「だから、わたしたちは落膽しない。たとわわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。なぜなら、このしばらくの軽い患難は おおいて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」(コリント人への第二の手紙 4:16~18) 本文に記載されている、落膽していない理由を詳しく見てみましょう。

**第一に、私たちの外なる人が後敗されても、私たちの内なる人はますます新しくなるからだとしました。**

「外なる人」は、死ぬ肉体を指すのです。「内なる人」は、罪の性質に汚染されて支配されている古い人を脱ぎ捨て、聖霊に新しく重ねて生んで、新しい生命を持った新しい人を指す言葉です。私たちの外なる人は後敗します。肉体は病気と傷つき年老い死に至ります。しかし、聖徒たちは、このように衰退する肉体によって落膽しないです。その理由は2つあります。肉体の幕が崩れると、私たちの魂は、手で作られなかった家に入るからです。永生のする内なる人にふさわしい外なる人を被る日が来ます。その日が私たちの主イエス・キリストが再臨なされる日なのに、その日に起こる状況がこのよう描かれています。「ここで、あなたがたに 奥義を 告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして 変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は 朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは 変えられるのである」(コリント人への第一の手紙 15:51~53)  
未信者は肉身の衰退を経験しながら、嘆息し、落膽している中で、ついには諦めてしまいます。聖徒たちはそうではありません。老いと死は絶望の谷に下る過程ではなく、父の家に進む過程であるという事実を知っているからです。将来には弱い体が強い体に、死ぬ体が死なない体に、朽ちる体が朽ちない体に、肉の体が霊の体で、必ず変化するのを知って期待するからです。

そしてこの世を生きていく間にも霊的な言葉と聖霊の満たしを介して内なる人が日増しに新しくなります。したがって、聖徒たちは肉体の衰えによって、落膽しません。

**第二に、私たちがこのしばらくの 軽い患難は おおいて、 永遠の 重い 栄光を、あふれるばかりにわたしたちに 得させるからとしました。**

患難はだいたい 心配、恐怖、悲しみ、不快、喪失、痛み、別れのようなものを伴います。苦難という言葉には、「軽い」は形容詞が不適切です。もし「軽い患難」と言う人がいる場合は患難を経験しない人だと明らかであると思うようになるでしょう。ところで、今日の聖書の本文に使徒パウロは、「苦難の軽いもの」と言いました。違って行って「軽い患難」と表現したものです。驚くべきことに、パウロは患難を経験したことができなかったからではなく、かえって苦難をたくさん経験したので、このような言葉を大胆にそして確信を持って言っているという事実です。

使徒パウロが経験した苦難についてコリント人への第二の手紙にこのように記録されています。「彼らは キリストの 僕なのか。 わたしは 気が 狂ったようになって 言う、 わたしは 彼ら 以上にそうである。 苦勞したことは もっと 多く、 投獄されたことも もっと 多く、 打ち 打たれたことは、 はるかに おびただしく、 死に 面したことも しばしば あった。 ユダヤ 人から 四十に 一つ 足りない 打ちを受け たことが 五度、 ローマ 人に 打ち 打たれたことが 三度、 石で 打たれたことが 一度、 難船したことが 三度、 そして、 一昼夜、 海の上を 漂った こともある。 幾たびも 旅をし、 川の 難、 盗賊の 難、 同国民の 難、 異邦人の 難、 都会の 難、 荒野の 難、 海上の 難、 にせ 兄弟の 難に 会い、 勞し 苦しみ、 たびたび 眠られぬ 夜を 過ごし、 飢えかわき、 しばしば 食物がなく、 寒さに 凍え、 裸でいた ことも あった」(コリント人への第二の手紙 11:23~27) おそらく試練を受けた日におけるパウロに比喩する人を捜すのは容易でないこととなります。このようにひどい苦難を経験した人が患難を指して「軽い患難」と言われたのは不思議なことですがそれゆえに、誰もあえてパウロ使徒の表現を不適切と論駁することはできません。ただし、このように苦難を「軽い患難」と形容した理由と根拠が何なのかを質問する必要があります。使徒パウロは、「私が受ける苦難の軽いもの」と言わず「私たちが受ける患難の軽いもの」としました。私たちが受ける苦しみを「軽い患難」と呼ぶようになる、その理由を列挙してみましょう。

**第一に、私たちが受ける患難は、私たちが犯した罪の重に比べると軽いしかありません。**

元の人は患難の中に生きるように造られた存在ではありません。神がご自分の形状と形に造られたアダムとエバを住ませた、エデンの園は痛みもなく害もない楽園でした。これらの人生に苦難が近づいて来たのは、人間の不従順と逆らう反抗のためでした。人間がサタンの誘惑に陥って禁止されたその木の実を取って食べたので、神に罪を犯しており、これによって、人間が住んでいるところは、いばらとあざみが生えました。その日以来、人間社会は悪行と争闘と殺人で汚れたし、自然の脅威とあらゆる病気を免れることができなくなりました。実に人間の犯罪の、重に比べると、人間が苦しむ患難はむしろ軽いとするしかありません。

**第二に、「軽い患難」と私たちがためらわずに、確信を持って言う非常に恵な理由があります。**

私たちが受ける患難は、私たちの主イエス・キリストが私たちが救うために受けた苦難にあえて比較することができないからです。イエス・キリストは、罪のない神の息子として、私たちが救うために、人の体を着て世の中へきましたところが、罪深い人生から蔑視を受けられ鞭で打ち 十字架につけられ死なれました。

**第三に、「軽い患難」と私たちがためらわずに、確信を持って言うことになる理由が、またあります。**

私たちが受ける患難によって得られる変化と所得が非常に重くからです。患難にあえば分数を超える欲を捨ててしまうことになり、神様を仕えるために怠惰だったことを後悔します。患難にあえば高慢を捨ててしまう、神のみ依頼することになります。苦難を経験することで試練を受ける者たちを理解して助けて苦難中の助けてくださる神の手を体験するようになります。患難を通して世の中に執着せず、主イエス・キリストの降臨を慕い、天国を慕います。

**第四に、「軽い患難」と私たちがためらわずに、確信を持って言うことになる理由がまたあります。**

私たちが受け取る患難は将来享受する栄光と比較すると優に比較することがないからです。イエス・キリストを信じるので、主の仕事に熱心につきまますので、福音を広めるため、受ける損失、犠牲、迫害などの試練は「キリストと共に受ける苦難」という栄光な意味があります。

**第五に、「軽い患難」と私たちがためらわずに、確信を持って言うことになる理由が、またあります。**

私たちが受ける試練はしばらく間に受けるからです。私たちがこの世に生きる間、退屈な試練を経験するとしても、天国で享受する永遠の栄光に比べると非常に短い瞬間に過ぎません。本文に「私たちの見て回るのは目に見えるものではなく目に見えないものだから見えるのはちょっとで目に見えないのは永遠である」としました。「振り返る」という言葉は、視線を固定させて眺めるという意味です。私たちは、衰退する肉に目を固定して眺めるのではなく、天国を見つめなければなりません。

復活なされたイエス・キリストの栄光の体の形のように変化することを、信仰の目で見なければなりません。この世で受ける苦難に目を固定せず患難が祝福になり苦難が栄光になるのを願わなければなりません。患難によって得る祝福を見つめなければなりません。そして将来に享受する極めて大きく永遠の栄光を見つめなければなりません。キリストにあって受ける試練は無意味なものはありません。神を恐れ、主を仕えるにあう患難に必ず比較することができない大きな栄光が付いて来ます。イエス・キリストを信じる人は、肉の衰退にも落膽しない理由を持っています。様々な試練に会っても、落膽しない理由を持っています。患難を指して「軽い患難」とためらわずに、確信を持って言うことができる十分な理由を持っています。聖徒の皆さんは、このような理由を持っている者らしく大胆と希望を持って生きて行かれることを願っております。